



池内 了

研究者の別姓使用に関するアンケート結果について

—— ジェンダー問題の多角的検討特別委員会 ——

日本学術会議第135回総会の会期中に、ジェンダー問題の多角的検討特別委員会より、第18期日本学術会議会員の皆様に「研究者の別姓使用に関するアンケート」をお願いしました。研究者の別姓使用については、第17期の「女性科学者の環境改善」特別委員会で議論され、第132回総会で決議された「女性科学者の環境改善について（要望）」においてもこの項目を採り上げています。第18期においては、当特別委員会にワーキング・グループを設置して、この（要望）が履行されるよう努力を続けております。このアンケートは、文部科学省や研究機関に対し要望の実現に向けての資料とすべく、まず会員の皆様のご意見をお聞きしたいと考えて実施したものです。以下にアンケート結果を報告するとともに、アンケートに協力下さった会員の皆様に深く感謝致します。

本アンケートは、日常的な様々な局面での別姓使用

の希望があるものの、特に研究者としての社会的認知に深くかかわっている文部科学省の研究者登録と学位記に絞っての質問としました。その各々についての質問事項と回答結果は以下の通りです。

「回答数」について

回答数は、2001年7月9日の最終集約で114名であり、会員数210名に対する回答率は54%でした。各部署ごとの回答数をまとめると

	1部	2部	3部	4部	5部	6部	7部
回答数	23名	10名	9名	17名	15名	19名	21名
回答率	74%	38%	35%	55%	45%	63%	64%

でした。2部、3部、5部で、過半数の回答が得られなかったのは残念です。

「質問事項」

文部科学省の研究者登録の姓名は

- (1) 研究者の希望によって、戸籍名と通常使用している姓名のいずれでも使うことを認める
- (2) 研究者が希望する場合は、戸籍名を使わず通常使用している姓名だけを使うことを認める
- (3) 研究者が希望する場合は、戸籍名と通常使用している姓名を（括弧書きなどで）併記する
- (4) 戸籍上の姓名に限る

「回答結果」

上記の（1）－（4）に対する回答数分布は

	賛成	反対	その他
(1)	75名	6名	3名
(2)	43名	10名	
(3)	44名	7名	
(4)	1名	54名	

となりました。(4)の戸籍名に限るべきという回答は1名しかなく、回答を戴いた会員のほとんどの方が、何らかの形で別姓使用を認めるべきという意見であることが明らかです。なかでも、(1)の研究者の希望に沿った柔軟な対応に対して一番の支持があったことが注目されます。

なお、本年4月から、文部科学省は研究者登録を「研究者の希望する姓名」として良いとの方針を示し、この問題は学術会議会員の多数の希望通りとなりました。

「質問事項」 学位記について

- (A) 研究者が希望する場合は、通常使用している姓名を記載することが望ましい
- (B) 戸籍上の姓名を記載するのが望ましい
- (C) 学位を授与する大学の判断に委ねるのが望ましい
- (D) どちらでもよい、わからない
- (E) その他

「回答結果」

上記の（A）－（E）に対する回答数分布は

- (A) 65名 (57%)
- (B) 13名 (11%)
- (C) 11名 (10%)
- (D) 4名 (4%)
- (E) 10名 (9%)

となりました。学位記に関しては、(B) 戸籍名が望ましいという意見が13名ありますが、やはり (A) の研究者の希望を尊重する意見が過半数を占めています。

学位記の記載の仕方は大学に任されており、このアンケート結果を国大協等にお知らせして改善を要望したいと考えています。

なお、JAICOWSが行った研究連絡委員会の女性委員への同様のアンケートによれば、文部科学省の研究者登録について「戸籍名に限るべき」は2%、学位記について「戸籍上の姓名の記載」は7%であったそうです。誤差の範囲を考えると、会員からの回答とほぼ同じ傾向を示していると言えるでしょう。

「自由記述欄の意見」

以下に、自由記述の欄に書かれているご意見を列挙しておきます。表現を若干変えてある部分があり、すべてのご意見を収録していませんが、ご容赦下さい。

(複数の支持があった意見)

- 戸籍にこだわらずもっと自由にするのがよい。研究者の希望・選択に任せるようにすべきである。
- 本人の希望により、どの方法でもとれるようにするのが望ましい。
- 学会活動で通常使用している姓名を用いることを認めたほうがよい。
- 研究者登録の姓名は研究者の希望でよいが、いったん決めたら継続的に使用してほしい。
- 研究者の研究活動の実態ないし背景に即したアイデンティフィケーションを阻害しないような仕組みを保障すべきである。
- 本人のアイデンティティが姓名でも（一貫して）表現される方がよい。
- 研究者の姓名が変わると文献検索上で不利がある。
- やや高齢で結婚する方も少なくない現在、研究業績のある研究者が旧姓を継続して使用できることは、学界にとってもメリットがある。
- 学術業績と戸籍とは本来無関係の問題（なので研究者の希望にそうべき）。

(以下は個人意見です)

- 少なくとも学術体制上の問題としては、「自己決定」の理念を貫くべきだと考える。

- 戸籍上の姓名が大学で用いられるとしたら、通常使用している姓名を括弧書きで入れることは本人にとっても一般にとっても便利。
- 日常的にも著作等でも戸籍名と違うものを使っており、不快な経験もあり、他人事とは思えない。
- この問題は人権にかかわるのはもちろん、「学術体制上」当人に対して重大な利害問題に付らなと思っています。当人の意思尊重が大原則。
- 通常使用している姓名を研究者登録、学位記等に用いることに賛成であるが、あわせて当該機関が戸籍上の姓名をまちがいないように把握できるような配慮が必要。
- パスポートや就職に際しての書類に、戸籍名と通称名を並記するようになれば、科研費や学位記には本人の希望する姓名を書くことができるようになる。ともかく、不自由している人々（特に国立大など）が多いので、改善が必要。
- 「要望」の第8項目を速やかに実行に移すべきである。自分の分野ではすでに定着している。
- 結婚、離婚によって、姓を変える人もいるので、一般に同一人の同一性の確認ができる工夫が必要。夫婦別姓への方向性を重んじつつ暫定的に処理すべき。
- 「通常使用している姓名」によって研究者が特定可能というのは研究者の集団が排他的なムラ社会になっていることを仮定しているように思われる。むしろ、「旧姓」に限定する方が問題が少ないのではないか？

- 戸籍制度を早くすっきりさせるべきだ。
- 気づかれていないことがらが、まだ女性研究者にとってあることを考慮し、学術会議としてリーダーシップをとって改革していただくことが期待されます。今回のアンケートもその一環として重要であり、ご努力に敬意を表します。
- 文学や芸術では、どのような名を使用しようとそれなりに評価されている。研究も同じだと思います。
- 新旧両方の名前から検索できるようにしないと不都合が生じると考えられる。
- 研究評価、研究協力などの点からは、姓名を明確化することが必要。
- 私の属する機関では、公的な文章を除いて女性研究者の旧姓使用を受け入れています（論文、学会、研究活動で）。
- 学位記は再発行・書き直しはできないことになっている。従って、本人が一生の決定をするという自覚の下に選択することが大切。戸籍上の姓名も変化することがあり、決してパーマネントなものではないのだから、戸籍名にこだわる意義はない。科研費申請名や論文著者名は変更自由にすればよろしいが、たびたび変更することのメリット・デメリットは本人にかかるのであって、審査する側の問題ではないという事実を忘れるべきではない。
- 同一人が2つの名前を用いることは混乱を招くので、研究上使用している名前に絞るのがよい。
- 氏名は本人であると認識できれば何をいようと本人の自由であるとの判断に立ちたい。そもそも戸籍

は当人を判定するためのものであり、明らかに本人が当人と認められるならば、いろいろな方法があってよいはずである。

- 論文著者名と申請書類での姓名の合致が審査上は極めて大切。
- どちらでもよいが、いったん決めた後は、統一的に使用すること。
- 国際学術雑誌の大多数は、戸籍名と別姓を併記する方式を採用している。科研費の申請にあたって、このルールが適用されるのが望ましい。
- 研究者の自立性を拡大していく方向がよいのではないか。

「追記」

本年4月から文部科学省の研究者登録において通称名(旧姓等)が使えるようになりましたが、まだ研究者一般に十分知れ渡っておりません。周知徹底することが必要と思われます。各大学・研究機関内で使用する姓名についても、この研究者登録に準じて、研究者の便宜をはかるよう改善の努力を期待しています。

池内 了 (いけうち さとる 1944年生)

日本学術会議第4部会員、ジェンダー問題の多角的検討特別委員会ワーキング・グループ委員長、天文学研究連絡委員会委員長、名古屋大学大学院理学研究科教授
専門：宇宙物理学、宇宙論